| 入試年度 | 2026 | 入試方式 | 一般（春季） | 課程 | 博士前期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 研究科 | 発達教育学 | 専攻 | 教育学 | 領域（分野） | |

出題のねらい

第一問
大学院で研究を進めるための語学力（英語読解力および抽象度の高い内容を自然で学術的な日本語に再構成する能力）を見ます。今回の英文テーマは教育学・特別支援教育の基礎理解の内容を取り扱っています。
第二問
大学院で研究を進めるための英語力を判定するために、研究で不可欠な論旨の把握と情報整理力を確認しています。また、SDGsや評価に関する基礎的な理解もみています。

解答・解答例または採点時の評価ポイント

【解答例】
第一問
＜模範解答＞「障害」とは、本人が支援を必要とするような困難や問題を経験している状態を指し、個人に本質的に備わった属性ではない。さらに、生活上の困難や問題は、時代、社会的文脈、あるいは文化的環境によって生じる場合もあれば、生じない場合もある。生まれつき存在する発達特性は生涯にわたって持続するが、それが日常生活上の困難としてどの程度現れるかは状況によって異なる。前にも述べたように、そのような困難が日常生活において表面化していない場合、その人は発達障害があるとはみなされない。言い換えれば、発達特性が存在していたとしても、それが生活上の重大な支障（困難）をもたらさないかぎり、発達障害として同定されることはないのである。
＜原文＞「障害」は，当人が支援を必要としている困難や問題を抱えている状態のことであり，特性のある当人の属性ではない。さらに，生活上の困難や問題は，時代，社会や文化の影響により生じることもあれば生じないこともある場合が多い。持って生まれた発達障害特性は生涯持続するが，生活上の困難は状況により表面化することもしないこともあるのである。そして，繰り返しになるが，生活上の困難が表面化していなければ，発達障害とされることはないのである。

第二問
（1）教育者は、従来の評価方法に加えて、自己評価や相互評価など、より振り返りを重視したパフォーマンス型の評価方法を組み合わせ、学習者が自身の内面的な変化、批判的探究への理解の深化、関与や市民的主体性などの側面について洞察を示せるようにする必要がある。
（2）モニタリングと評価は、プログラムの側面（例えば、学習目標、教材、教員のコンピテンシー、学習環境）、プロセス（例えば、教育実践、学習資源、学習者の参加）、成果（例えば、知識、コンピテンシー、価値観・態度、変容による効果）、および文脈的要因に焦点を当てることができる。